

③ 佐伯氏の「豊後」の作品の中で、城山を描いていますが、既に  
羽柴秋吉先生の佐伯史談集第三十六号で触れておられますが、書い  
たす。しかし、

「佐伯の春巻(城山)は、夏先が城山にあり、秋又早く城山に  
り、冬は、口を先づ城山の林に多く也。」  
の文章は、口を先づ城山と云うのは、口から出てくるほどです。

④ 三の地より頂上まで、そして水の手門より雄池、雄池を経て日  
浮の橋宮へ下る口には、徹夜には最通の土の道、特に初冬、厚  
苔葉を多く踏んでの故歩の格別であり、かほれ九のより  
です。

あとがき

昭和四十五年六月二十九日付大分合同新聞夕刊の記事  
を掲載させていただきます。(若干修正)

佐伯市は市内大手三三の丸公園に建設する佐伯市文  
化会館の設計を、東京の梓妻繁事務所の清田文永社長  
(佐伯市出身)に依頼していただき、その設計図がこのほ  
ど、河市役所に届いた。

文化会館は、舞臺三階、地下一階、延べ四千五百平方  
メートル、三の丸公園に多つた旧鶴谷城跡のイメリジを取り  
入れて、会館正面に石かきを配し、階段になつた玄関  
入り口に高さ二十七メートルのシンボル塔を建てる。

また構造も、かつて佐伯湾に浮かんでいた船かげ船  
をかたどつたつくりにしてあり、全体のスタイルは、  
外を寺社。

地下は食堂、郷土資料室、一階は三百五十席の中ホ  
ールや会議室、結婚式場、事務室、二、三階は千三百席  
の大ホール。総工費約三億五千万円の二か年継続事業  
で十一月ごろ着工、来年秋に完成の予定。  
市は工事費の一部を一般の寄付に仰ぐほか、目下起

債目庫補助の獲得に力を尽せざるを得ない。遂に  
完成すれば佐伯市と南海郡部の文化センターとして  
利用する。(文化会館完成予想図の写真を添付してあります)

註

① 城山には、水丸、二丸、西出丸、北出丸、水の手門(雄池、雄池)

などの遺構があり、頂上には、独歩碑も建立されています。

② 三の丸には、黒門(三の丸橋門、第三段、毛利高尙創建)鳥居(旧  
藩時代に徳行神社、昭和初期にかけて、初代高政、八代高權と  
奉祀した毛利神社がありました)城山還原の碑(保三位子  
爵(毛利)毛利高直撰(高直)高野(毛利)高政が朝鮮征伐よ  
り持ち帰られた不吉科の常御高木)、教育家野村越三先生胸  
像(大正十一年佐伯市出身彫刻家片岡彌太郎製作)、中根  
貞孝先生歌碑、古井戸などの文化財があります。

また、歌年表、明治百年記念事業の一として、琴明亭  
公園(旧藩主涼台跡)が造られておきます。(かわり)

随想

西南の役西郷本営跡を訪ねて

賛助会員 高橋 智

去る九月二十日、雨の日向路に佐伯惟治公の遺跡を巡  
つた一行二十一名は、中井平一郎北川村長の御案内で、  
最後に西南役の戦跡である可愛島山麓の、北川村大字長  
井窪(いづみ)部落を訪れた。

この部落は、天孫瓊杵の御陵と称せられる古墳  
があり、その御陵の付近には、尊皇屋敷にトタンを張つ  
た農家がある。それが西郷隆盛が宿泊して、ここを本営  
とし、児王、魚太郎などがある。この家、宮崎県指定史蹟で  
あり、長く保存するおまに北川村で買ひとり、中津より

屋敷張り職人を雇つて草葺の上はトタンを張つたとの事  
と、この家には西郷の使用した親を以て、村田鏡、ラ  
ッパ、背囊の木箱等、貴重資料が在くさん置かれてある。  
御案内の中井村長の説明をよみて、この戦跡のい  
われと、西南役の概略を追想して見たい。

明治十年一月西南の役は勃発し、二月十五日西郷隆盛  
は桐野利秋、篠原國幹等と共に兵を率いて鹿児島と出発  
同二十二月には谷干城少将のたて籠る熊本城を包圍し友  
百姓を集めた熊本鎮台、鎧袖一触、何程のことやあらん  
とばかり、激しい攻撃を加えたが、思はず強固に抵  
抗を以て誤算を生じ、三月二十四日には田原坂で敗れ  
て熊本城の圍を解かざるを得なくなり、それより八代  
人吉、宮崎と各地を転戦したが、官軍の陸海両方面より  
する豊富なる兵力と装備の前には、食糧、醫藥の補給すら  
ままならぬ薩軍に戦は利あらず、本隊は日向街道を北に  
追われ、八月初旬には西郷を擁して高島から延岡にはい  
つたが、ここも官軍を迎え討つには地形的に不利なため  
更に北に退いて主力を長井村へ冷の北川村(うち大字長井)に  
集結した。

ここで延岡との境の山和田越一帯の要害に陣地を布き  
この方面での戦争の最後を飾つた和田越の激戦が展開さ  
れた。薩軍の兵力は三千、これに対する官軍の兵力は三  
万。いかに士気と団結にまさる薩軍も衆寡敵すること能  
わず、八月十五日には和田越の戦に敗れ、俵野付近に残  
りの兵力を集結した時は四面皆敵、まるで袋の中の鼠か  
釜の中の魚の如き状態であつた。

西郷が俵野の児玉家にはいつたのは八月十五日で、こ  
こを本營として休戦が繰られた。最後の手段として切  
腹か、玉碎か、重田を突破して脱出かの軍議が凝らされ  
たが、結局血路を開いて脱出に一決し、当時薩軍大將

日本に西郷一人であつた日本に着目かかなかつた陸軍大  
將の制服を焼却したのもこの児玉家であつた。  
かくて八月十七日午後計時、夜陰に乗じて敗残の兵六  
百に守られたながら、その其側に警備を標高七百二十余米  
岩石殺々たる可愛無に登り、遂に山路を攀援して  
田井、求良等を経て時として官軍に遭遇し、時には  
戦を避けるため道なき山にわけ入割ながら血路を拓ら  
いて、鹿児島にたどりつたのが九月十日であつた。  
かくて城山にたて籠り、最後の決戦を敢行、西郷が腕  
障を受けてたおれ、部下の分錯によつて五十一才の波瀾  
の生涯を閉じたのが九月二十四日である。西郷の最期、  
城山の陥落と共に、殆んど九州全境を騒がしめ、西南  
の役もついに終りをきつたのであつた。

孤軍奮闘團を衝いて還る

一百里程 墨壁の關

我が劍はすでに折れ我が馬は斃る

秋風骨を埋むる故郷の山

西郷南洲の絶句である。俵野から可波岳の嶺を仰ぎ眺  
める者にとつては、この詩は南洲の心境が切実な感懐を  
帯びて、聞く者をして当時の戦況と手にとるようによ  
きおびて、聞く者をして当時の戦況と手にとるようによ  
きおびて、聞く者をして当時の戦況と手にとるようによ  
きおびて、聞く者をして当時の戦況と手にとるようによ

この四圍の地形を指し下ら落る中井村長の城を又  
をわびて、聞く者をして当時の戦況と手にとるようによ  
きおびて、聞く者をして当時の戦況と手にとるようによ  
きおびて、聞く者をして当時の戦況と手にとるようによ  
きおびて、聞く者をして当時の戦況と手にとるようによ

最近、参議院議員西郷吉之助先生がこの地を訪れ、や  
はり中井村長の案内で児玉屋敷を訪れ、祖父南洲の悲愴  
な晩年を想つて、感慨無量なるものがあつたといふので  
ある。

西南の戦跡は、西郷の遺徳をしのぶに、西郷の遺徳を  
しのぶに、西郷の遺徳をしのぶに、西郷の遺徳をしのぶに

約三万、之に對する官軍は約六万。戦死者各六千余。

西郷がこの拳銃に積極的になつたことは事實のようにあり、西郷の重んずる大義名分が欠けてゐるよう思われる。にもかかわらず、鹿兒島士族の暴発を押えることが出来ず、これを慰撫することが出来ない以上、

ひとり身をかくして難をさけるか、政府にくみして士族を鎮圧するか、士族に擁せられて政府と対決するか

それ以外に道はなかつた。そして情に厚い彼は最後の道を選んだ。勿論名分の乏しいことは遺憾の上で、勝敗を度外視して鹿兒島士族と生死を共にしたと云つてもよいであらう。

(著者住所 南海部郡本庄村大字三股)

毛利家の法要に参詣して 判 宗 弘

去る十月四日、東京から久々に黒田久子様、毛利千代子様お二方が佐伯にお帰りになり、午後二時から養賢寺で速陀院殿(毛利高兼元正爵)墓院殿(同夫人)三十三回忌の法要が営まれた。史談会にもお参りせよ頂いたので、高木会長と私とが代表して、史談会の方や両夫人の孝友達に加つて参詣した。いと盛南宮御苑御殿であつた。

毛利高兼元正爵は明治九年肥後守上野藩主細川家より入つて、佐伯藩初代高兼公の後の嗣が、トイツに由緒存り、佐伯に帰られ、明治四十年の頃御一家東京に御引越まで佐伯にお住居になり、今因にお帰りの両夫人と佐伯小宮様に存じられ、自藩主御一家と佐伯町とはまことに密接親愛の年月を返され、大正昭和と年を経ても何彼と旧縁土に對する愛顧がつづいたのであつた。よきに類のない羨ましい縁であつたと、心にとり思つた。

(るべじよりのつぎ)

いふ事になりますと、問題は解決の方向へ前進するものであります。残念ながらそれを証する何ものもありません。左を想像によるをけですが、私は面白い問題だと思

いまして曾となつた兼定と志保が、休承の古伝と、地と對象に、この古伝の伝説をといひ、なさいと思ひます。(つづく)

研究

佐伯の港はどんなに勤さとしてゐるか

——主として木材の流通について——

大分県立佐伯豊南高等学校教諭 同 校御土誌クラブ顧問

本会会員 市野 頼 仁

第二章 佐 伯 港 (つづく)

五、海上輸送の特色及び問題点と佐伯港

(お新り) 千定と変更して四の「佐伯港における臨海工業の動向」から独立して本稿五の項目をとることにした。

(一) 海上輸送の特色及び問題点

(イ) 内航海運

二平合板の社長村上博之氏の言葉を借りれば、我が国は大変な大食漢の国であるという。そのわけは、日本の主要な港は外国より龐大な原料を呑みこみ、これに加して海外に輸出する貿易国であるとの比較である。社長はつづけて、製品を佐伯から福岡へ陸送するのと、大阪へ海上輸送するのと輸送費が同じ位であつたのが、近頃海上運賃が上昇したので、かなり陸運にきりかえざるを得なくなつた。

地方港が輸入した原料と製品として出す場合は、主要港から出港する場合が多い。従つて主要港の錯綜ぶり